導かれて

四季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
導かれて

【Nコード】
N9228M

【作者名】
四季

【あらすじ】
進級した私はこの学校の生徒としての最後の一年間を過ごすこととなった。同時に受験生のため、今年の夏休みはかなり重要。なのに、友達は遊びに行こうとしつこくてしつこくて。結局断れなかった私は友達と一緒に遊びに行くことになった。夏休みだもの、遊んでもいいじゃん。二泊三日のお泊まり&勉強会。ここでたくさんいい思い出をつくらう。三人でやって来たこの旅館は地元のほんの一部の人しか知らないある秘密がある。それを知って来たのか。それとも知らずに…。これは受験生三人と二泊三日のお泊まり&勉強

会が巻き起こす、そんな話。

1 お誘いの電話

私の携帯に電話がかかってきた。

「もしもし?」

「もっしもっし!」

樹里ジュリからの電話。

この時季になると彼女は私と遊びに行かないかお誘いの電話をかけてくるのだ。

「紫苑シオンにお誘いの電話。あのね」

ほら、来た来た。

「遊びに行か「断る」え?」

「今年、私達受験生じゃん? 樹里も知ってると思うけど、私授業についていけてなくて…その…この夏は勉強をとにかく頑張りたいの。誘ってくれてるのにごめんね」

「そっそっか…」

よし、あとは電話が切れるのを待つだけだ。

「な〜んちゃって! そう言つと思って今回は勉強会を開いちゃったのだ〜」

……え？

「知り合いに旅館を経営してる人がいて、その人に頼んだら家で三日間過ごしてくれたら料金無料で部屋も自由に使えてお料理食べ放題で、温泉だってOK！」

樹里のテンションが徐々に上がっていくのがわかる。それと同時に声の大きさがおおきくなってきた。

「勉強会なのにお泊まり出来るんだよ！！！」

「でも……」

「この機会を逃したらダメだって！」

どうしても私を連れていきたいらしいが私の決意は固いのだ。ちよつとやそつとで崩れない。

が、樹里も負けじとしつこく誘ってくる。

ここははつきり断って電話を切ろう。

そうすればいい。

「だからね、樹里。私は「ねえ紫苑が行きたがらない理由は何？」

……」

まさか割り込みされるとは思ってもいなかった。

予想外の出来事に無言になる。

これじゃあ電話を切れないじゃないか。

「今、紫苑は電話を切りたがってると思うの。ウチがしつこいから。」

「

わかってるんだ。
しかも鋭いし。

「でもね、去年も一昨年も断られたけどさ、ウチは紫苑と」

「…私と？」

「いい思い出をつくりただけなの」

…。

「受験勉強の息抜きって感じで行かな…行きません…か？」

ああ、ちゃんと考えてくれてるんだ。

そっだ、去年も一昨年も断り続けていた私は樹里の気持ちをよく考えていなかったのかも。

ごめんね、樹里。

「わかった、行こう」

半分樹里のおしに負けて言った言葉。

「え!？」

「でも、もう一人忘れちゃダメだよ」

「…あつ!!しまった、連絡してない」

「私の方から連絡入れとくから、じゃ、またね」

「あ、うん。ありがとね紫苑」

プーップーップーッ…。

「やっと終わった…。っと連絡入れなくちゃ」

二人もいいけど三人もいいもんね。人数は多い方が楽しめるって言うし。

「あつ、もしもし志保^{シホ}？急な話何だけどいい？うん、あのね」

こうして

物語が始まる！。

…」

まさか割り込みされるとは思ってもいなかった。
予想外の出来事に無言になる。
これじゃあ電話を切れないじゃないか。

「今、紫苑は電話を切りたがってると思うの。ウチがしつこいから。」

わかってるんだ。
しかも鋭いし。

「でもね、去年も一昨年も断られたけどさ、ウチは紫苑と」

「…私と？」

「いい思い出をつくりたいだけなの」

…。

「受験勉強の息抜きって感じで行かな…行きません…か？」

ああ、ちゃんと考えてくれてるんだ。

そうだ、去年も一昨年も断り続けていた私は樹里の気持ちをよく考えていなかったのかも。

ごめんね、樹里。

「わかった、行こう」

半分樹里のおしに負けて言った言葉。

「え!？」

「でも、もう一人忘れちゃダメだよ」

「…あつ!!しまった、連絡してない」

「私の方から連絡入れとくから、じゃ、またね」

「あ、うん。ありがとね紫苑」

プーップーップーッ…。

「やっと終わった…。っと連絡入れなくちゃ」

二人もいいけど三人もいいもんね。人数は多い方が楽しめるって言

うし。

「あっ、もしもし志保^{シホ}? 急な話何だけどいい? うん、あのね」

こうして

物語が始まるー。

2 山がいつぱい

後日、私達は旅館を目指して歩き始めた。

「本当にこの道であってるの？」

「大丈夫大丈夫、間違いはないって!!」

「あの…やっぱり間違ってると思うんですけど…」

遠慮がちに話す志保と間違いを否定しない樹里。

地図の通りに歩いていたらもう着いてもおかしくないのに、着かない。

歩き始めて一時間が経過し、少し休憩することにした。

「いや、三人で来れてよかった！紫苑ってばずっと断るばかりでさあ」

「(そんなに断る言ったっけ…?)でも来たからいいにしてよ」
隣に座る志保が小さな声で話す。

「誘ってくれてありがとう…紫苑ちゃん」

「あ、いえいえ。でも樹里が計画したことだから樹里にいった方が…」

「連絡してくれたあの紫苑ちゃんだから…」

ニコニコする志保に私もつられて笑う。

「おいおいそのお二人さん、ウチのこと忘れてない？」

「あ、樹里ちゃん。素敵な計画立ててくれてありがとうございます。一緒に参加できて…すごく嬉しいです」

樹里はそうとう嬉しかったのか志保にお前は素直だなくとか言ってる。

ところでこの周辺に人は住んでいるのだろうか。

山がいつぱいあってどこまでも木々が続いている上に一本の道路が向こうに…？

「ねえ、あの軽トラックの人に聞いてみない？」

野宿はごめんだから。

「そうと決まれば行動あるのみ！！」

樹里が道路に飛び出す。

すると軽トラは止まり、運転席から顔を出した。

「あの、地元の人ですか？私達ここに行きたくて来たのですが、道に迷ってしまってます…どうすればここに辿り着きますかね？」

「…君達はここに行きたいのかい？」

「」「はい！」「」

軽トラのおじさんは何か言いたそうな顔をしていたが、途中まで荷台でよければ乗せていくよって言うてくれた。

ヒツチハイクだ。

「荷台」

「わー始めて乗ったー!!」

「ねー!」

樹里と私は二人でキャツキャツとはしゃぐ。ちなみに志保は運転席の隣に座っている。

「そこの旅館に行つて何しに行くのかい？」

「二泊三日のお泊まり&勉強会をしに…」

おじさんはそうかと頷いて志保に一言言った。

「いい思い出になるといいなーと。」

あつという間に目的地に着いてしまい、私達はお礼を言つて軽トラのおじさんが帰っていくのを見ていた。

ただ、その軽トラの中でおじさんは溜め息をついていた…。

そしてこんなことを言う。

「本当にいい思い出になるといいのにな…」

一息入れてからおじさんは言葉を紡ぐ。

「何も起きなければいいのだが…」

そう呟いていたことを彼女達三人は知らない。

そこから歩いて五分ほどのところ。

とうとう来てしまった。

彼女達の前に建つ旅館。

何も知らない彼女達はただ二泊三日のお泊まり&勉強会にワクワクして、これから何が起こるかなんて考えもしていなかった。

そして、おじさんが何か言いたそうな顔をしていたことに疑問をもつようになるのは先の話である。

3 帯をしつかり

とうとう着いた。

「すい…」

山の中にある旅館。

周りは木でいっぱいだ。

「すいませ〜ん、

誰かいませんか？」

樹里の声だけが響く。

「ちょっと見てくるね」

志保は扉の前に立った。

二三回ノックしてみたが

応答なし。

「ここであつてるよね？
もしかして違うところ…
かな？」

不安になりながら三人で
扉の前に立っていると、
人が歩いてるのが見えて
きたから走り出した。

「紫苑、
どこにいくの!?!」

「今人が通ったから
聞いてくる!」

走り出して五分。

前を歩く人は

止まらない。

それよりも

私の体力がもたない。

「止まって下さい…!」

声をかけてんのに

返事をしない。

「止まって

…止まって下さい!?!」

ピタリと前の人[。]が止まった。

長い髪が風になびいて
いる。

「すみません、
旅館のことです…え」

急に姿が消えたと思うと隣にいた。

「あの…」

170センチは

あるだろうその身長。

私より背丈が高いから。

「あの…」

『…ここに何の用だ…』

小さい声で話す。

「泊まりに来たんです。

そのの」

私は後ろの建物を指差した。

するとその人は

『去れ…』

と言うものだから思わず聞き返した。

「え？

どういうことですか？」

一息したその人は
私の方を向いて
話しだした。

『悪いことは言わない。
去れ、ここから去れ…』

「去れ去れ言う
その理由は何ですか？」

『…』

黙ってしまったその人は
着物を着てるのに、
帯が緩んでいた。

『友のところへ帰れ…
貴方はここには
いていけない…』

「…
」
「どついう意」

トンと押されて
しりもちをついた。

『友をいつまでも
待たせてないで…』

笑ったその人は

私が瞬きしたら消えた。

疲労が溜まってるのか？
自覚はないけど。

「でも…」

帯が緩んでいたその人、
何か知ってそうだった。

それから私は
友達のところに戻ると
二人は旅館の女将と
一緒にいた。

女将は私の方を向くと
ニコリと微笑んだ。

「あ、紫苑おかえり！」

「樹里、志保、
ただいま」

女将は私達を旅館へ案内
した。

旅館

「本日は遠いところから
足を御運びいただき誠に

ありがとうございます」

襖の奥から

また一人二人。

「…」

ペコリ。

「やあ、樹里ちゃん

こんにちは」

「こんにちは。

お招きいただき

ありがとうございます」

「どうやら、

あいさつしてきた人は

樹里の知り合いらしい。

「女将…ちょっと…」

知り合いの人は女将に

耳うちしている。

「小夏が？…まったく

若女将ときたら」

女将と知り合いの人は

席を離れた。

私達三人と話さない人。
何か話題を出すために
咄嗟に話す。

「あの、あなたは…？」

するとこつちを向いた。

「若女将…」

え…だって今さっき話に出た若女将？
本人隣にいたのに？

「ああ、
いつものことですから。
気にするのはやめたの」

苦笑いする若女将。
ついでに
小夏という人のことも
聞いてみた。

「小夏は女将の孫です。
まだまだ子供なのに
礼儀が出来すぎて…。
やっぱりここで育つと
そうなるのは
無理もないのかも
しれないわね…」

少し悲しそうだった。
若女将って結構
話すことがわかった。

「小夏って

不思議な子供よ？」

それに食いつく志保。

「不思議…ですか？」

志保の返しに若女将は
ちよっぴり笑って返す。

「私の知らないことを
知っているのよ」

ま、私が知らなすぎる
だけかもね。
と言う。

「小夏、

あなたたちのこと
気に入ると思うの。

勉強会だけど勝手に
お邪魔してしまうかも。

…でもね、

…相手しておいて損は
ないわ」

「損って…」

「言い方が

変だったわね。

小夏は答えを導くの。

正しい… 答えを」

正しい答え。

ふと、

あの帯が緩んでいた人を
思い出した。

あの人も

そんなことをいいそうな
人みたいだから。

「そうだ、若女将。

紫苑ってば女将と話した
って言うんですよ」

若女将は首を傾げた。

「はい、

追っかけました。

でも、ここには女将が
いるんですね」

そう、その人は… 着物が

ことと同じ柄が
入っていた。

「身長170センチ
くらいで、

長い髪がありました」

若女将は私の肩を
つかんでこう言った。

「その人…その方の
名前は!？」

若女将は私の目をみた。

名前まではわからない
というとき若女将は
ガツクリ。

「もし、次に会うことが
会ったら

…ごめんねって
伝えてくれる？」

「自分で伝えた方が
いいのでは?」

「……それは…無理よ」

若女将は悲しく笑う。

「この旅館で会えたなら

…ううん、

よろしくしてね?」

じゃ部屋の案内するね?

といて、

景色がキレイな部屋へ
案内してもらった。

そして

若女将は忠告する。

「みなさん、

こちらの指示には

必ず従って下さい」

4 殺るか殺られるか

「若女将」

女将に呼ばれて

若女将は肩を揺らす。

「今…いきます」

若女将はそそくさと
歩き出した。

「樹里ちゃん、さっきの
話し…出して
よかったのかな？」

志保は樹里に
問いかける。

「大丈夫だよ！
紫苑もそうでしょ！？」

そんな聞き方されたら
うんしか、
肯定文しか言えないじゃ
ないか。

「でもさ、ここの指示

って
何かな？」

二人も
気になつたらしい。

「ねえ、手分けして
探してみない？」

樹里の提案。志保と私も
それにのつた。

「何か会つたら携帯で
連絡。

部屋に戻るもよし」

それを確認すると、
私達はそれぞれ別れた。

その瞬間、
手をつかまれた。

「ヒッ……」

思わず出た声。
だが、その人は帯が
緩んでいた人だった。

『何故去らない……』

「だからそれは」

言いかけて私は気づく。
この人、
若女将と似ている。

「…」

顔をずっと見ていると

『どうした？』

と聞かれたが
何でもないと答えた。

『若女将に会ったか？』

そうだ、言わなくちゃ。

「若女将が伝えてと
言われたので
お伝えします」

しかし、
伝える雰囲気では
なかった。
その人は私を引っ張って
走り出した。

『貴方は餓鬼』

…小夏に会ってないね』

頷くとその人は
私に言った。

『小夏にはこのことを
話さないでくれ。

女将にもな。

嘘をついてでも…私の
存在は決して言うのでは
ないぞー』

私はその人に言われた
通りにした。

『我の名は…今は蝶と
呼んでくれ紫苑』

ちなみに蝶はさっきの
会話を聞いていた
らしい。

『友が心配だな…お前は
五月蠅いやかましい方を
頼む』

五月蠅いやかましい方…
樹里のことだ。

「志保は？」

『そっちは我が探す』

蝶は姿を消した。

「樹里

…見つけなければ」

樹里

「あゝあ、

迷子になっただ」

広すぎて帰り道が
わからなくなった。

「お姉ちゃん」

小さい声がする。

振り向くと

小学生くらいの女の子。

「お姉ちゃん、迷子？」

子供…もしかして…。

「小…小夏ちゃん
かな？」

すると小夏と呼ばれた

子はニコニコして
樹里に言う。

「お姉ちゃん、こっちに
行くと帰れるよ？
案内します」

言われたまま
着いていった。

志保

「あれは…」

女将を見つけた、
が様子がおかしい。

「今晚は誰が生け贄か？
若女将い？」

若女将は顔を
青ざめて震えている。

「もう止めましょうよ。
そんなこと…」

震える声を必死に
出した。

女将はそれを聞いて
若女将の顔を叩いた。

「何を言うの？」

止められないわ。ここに
来た奴らは

帰れないもの。絶対…」

背筋がゾクゾクとする。

みんなに

知らせなくては。

志保はその場を

去ろうとしたが、

帰れなかった。

「樹里〜、樹里〜！

樹里〜！？」

前方に樹里と子供。

走って捕まえると

樹里は

安心したように笑った。

「紫苑、よかった〜…」

私もよかった。

「じゃあね、

小夏ちゃん」

その名を聞くまでは。

『志保志保…!?!』

蝶は女将の姿を

見つけた。

あちらは

気づいていないようだ。

『止める』

蝶は走り出す。

「盗み聞きとは悪い子で。

でもあなたは

言えないわ。

ここで消えるのよ?」

女将は

志保に刃物を振った。

避けたがもう一振り。

『もう少し』

…あともう少し』

「さようなら」

女将が

志保の首に向かって刃を

突き出した瞬間。

パリンッ

刃は折れたうえ
志保からはねかえる。

「な、何なの？」

女将は折れた刃を…
正確には折れ曲がった
刃を見つめる。

『大丈夫か？』

志保には
聞こえていない。

「何者だあなたは。
この刃を折り曲げるとは
…やはりここで殺る」

女将は懐に隠していた
刀を出して志保に
切りつけた。

避けきれず怪我をした。

「止めて下さい女将！
止めて下さい…！！」

若女将は女将を
止めようとしたが

「ええい、五月蠅い」

と言って

若女将を突き飛ばした。

その先には窓ガラス。

大きな音を立てて

ガラスは飛び散った。

「若女将…!!?」

志保は余りにも衝撃的
すぎて気を失いかけた。

『…っ』

蝶はその様子を見て頭に
きた。

「邪魔者はいない。今度
こそ…」

女将の手から
刃物はない。

「なっ…」

どこにいった!？」

焦る女将。

それを見て

腹を抱えて笑う蝶。

そして再会のあいさつ。

『女将。お久しぶりで
ございます』

蝶の声に女将は
震えだした。

『派手に一体何をしよう
とした』

…若女将に何をした』

怒りが含まれる声、
若女将は倒れたままだ。

「何であなたがここに…
どうし…て…」女将の声は徐々に
小さくなる。

『若女将の怪我。
責任取るよなあ?』

蝶の不気味な笑み。
志保には何が起きたのか

さっぱり。

わかってるのは
女将が自分に攻撃して
こなくなったことと
一人で勝手に怯え
はじめたことくらい。

「た、助けてくれ。わ、若女将には悪いこと
…をした。」

見逃してくれっ！！」

蝶は

クスリと笑うと女将に
向かって刃を向けた。

『何言ってるの？
人を傷つけるってことは
自分も傷つく覚悟が
あるのでしょうか？』

その返事に女将は
声すら出なくなった。

女将の悲鳴を聞くのは
もう少し後の話。

『っ若女将、
しっかりして下さい！
若女』

蝶は
自分では助けられない
ことを知る。

誰かに手伝って
もらわなければ…。

『志保、聞こえるか？』

返事がない。

つまり

聞こえていないこと。

何故こんなことに。

蝶は自分を責めた。

『若女将…』

そう言っ

て涙を流したのは

その日だけ。

「若女将…」

蝶の思いが伝わったのか
志保は若女将の手当てを
始めた。

『志保、ありがとう…
ありがとう…』

感謝しつつ
蝶も手伝った。

若女将が
目を覚ましたのは
数時間後のこと。

「…ここは？」

「若女将、目が覚めて
よかったです。
応急手当…しておき
ました…」

若女将は
少し離れた場所に
倒れている女将を見て
志保が倒したのか聞くと

「違います…若女将も
見ていませんか？」

領かれ、
志保は考えた。

女将が自分に向かつて
突き出した刀は
折れ曲がった。
別に超能力が
あるわけではない。
たまたま起きた現象と
して扱うべきか？

いや、でもありえない。
刺さる前に折れ曲がる。
女将の刀はマジック用の
刀だったのか？
さっきの出来事も
パフォーマンス？

それでも
度が過ぎている。

「無事でよかった…」

若女将は
手当てしてくれて
ありがとうと言いながら
志保の頭をなでた。

蝶はというと

若女将が目を覚ました
直後にその場を
後にした。

『女将…許さぬものか』

蝶の気持ちは
怒りに溢れていた。
前に立っているのは
「お久しぶりです、…蝶
いや、蝶様」

『貴女は…?』

「忘れてますか?…まあ
そうですね、
あれからかなり時間が経過
しましたし、
姿が違うのは

当たり前です」

スラスラ話すその子は
樹里とさつきまでいた
子供。

小夏だ。

『…生意気な口を
我に聞くとはな』

「小夏は、蝶様に会えて
嬉しいですよ？」

『（心にもないことを…）』

「心にもないことをって
はい正解。
よくできましたね〜！」

蝶をバカにする小夏。

『若女将』

「ギリギリセーフだよ、
蝶様。

後少し遅れてたら
生け贄が増えてたよ。
小夏ね」

「蝶様がかawaiiそうとは
思いません」

「もちろん
若女将のことも」

『…んだと?』

しばらくの沈黙。

「ひよこひよこ
こちらにやって来るのは
止めてもらいますか？
いくら来ても…」

若女将にはあなたの姿は
見えないのですよ。

わかって下さい」

ああ、そうなんだ。
じやなきや我のことを
無視するなんてない。
やっぱり見えないのか？

紫苑には見えてるのに、
若女将には…どうしても
見えないのか…。

「蝶様、

これはどうすることも
できないのです。

あなたはそちら側の
人間。

あなたに託されたのは
見守ること。

違いますか？」

そんなの違う、違う。

『我は

見守るなんて出来ない。

傷つく人がいるのならば

助けるのが…

助けたいから』

「助けたい…ね…。

気持ちはわかりますが、

あなたのやることは

こちら側の人間にとって

怪奇現象。

もっと自然に

やらなければ

おはらいされますよ？」

心配そうにする小夏。

『はっ、おはらい？』

そんなの全然

怖くねえよ、恐ろしく
ねえよ』

何度やられても、

何度おいはらわれても

我は—

『何度でも

この地へ足を運ぶぞ』

「…そうですね」

小夏side

それが蝶様の覚悟。
唯一の家族の若女将を
守るために
選ばれた選択。

何故ここまで
追いつめたのです？
そんな必要
なかったのではないの
ですか？

小夏は
あなた様を許しません。
蝶様と同じ気持ちでは
ありませんが、
必ずしも蝶様の願いを
叶えて見せませす。

小夏 side 終了

「蝶様」

『何だ？』

「復讐したくて
しょうがないあなたを
止めるのはやはり
若女将のことですか？」

返事がない。

「望まないから…
悲しませたくないから
蝶様、一歩踏み出せば
世界も景色も
変わるものです」

何を言い出すのか。

「チャンスは
いつでもあります。
ですが、
効果的にやるのならば」

『「もつと先に」

『ハモつたな』

「
」
「
」

『それじゃあ我は』

「はい、

また会いましょう。

どうかご無事で」

『また

心にもないことを』

「そうですね（小夏も
あなたの味方ですから、
頼って下さいね）」

風が吹く。

木々が揺れる、
葉が舞い散る。

―殺るか殺られるか―

後戻りも出来ない。

もう

そんなことになっても
悔やまない。

復讐のカウントダウンは
始まる。

我を殺した奴らと
若女将にもそうしよう
とした奴らに。

憎しみと怒りが交ざり
合うなか
蝶は一步踏み出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9228m/>

導かれて

2010年10月13日05時16分発行